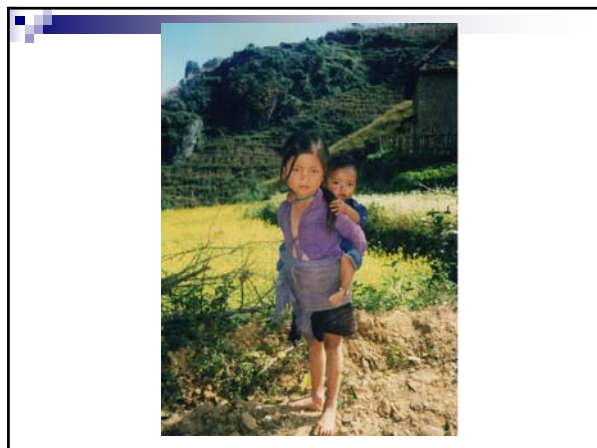


第4回ESD研究会

『国際協力と開発教育:「援助」の近未来を探る』
田中治彦著 へのコメント

ネパールの事例から

コメンテーター2: 磯野昌子
(かながわ開発教育センター)



Q. 途上国の教育状況を改善するためには
何が必要だと思いますか？

- ① 学校を建てる。
- ② 文房具や教材を支給する。
- ③ 貧困家庭の児童に奨学金をわたす。
- ④ 文字の読み書きができない人のための識字教室を開く。
- ⑤ 教師を養成したり、訓練をする。
- ⑥ その他

ネパールに見られる教育援助の風景

- ①一番人気、でも一番難しい「学校建設」
→援助の集中、先生が来ない、運営はどうするの？
→インフレ、予算オーバー、いつまで続けるの？
→「スポイル」、援助疲れ、不信感
- ②文房具や教材を送る
→日本のものは役に立たない(鉛筆よりボールペン)
→不用品を送るのは失礼
- ③奨学金
→公平性の問題、「ジェラシー」の種
- ④識字教室
→多言語多文化への対応、忘れてしまう

『国際協力と開発教育:「援助」の近未来を探る』へのコメント

- ①「アイ子」教材の卓越性
- ②国際協力の類型化の明瞭性
- ③国際協力と開発教育の融合性

①「アイ子」教材の卓越性

教材『「援助」する前に考えよう』(開発教育協会、2006年)

- 国際協力、開発教育の原点としてのアイ子
- 疑似体験により、「慈善型援助」を客観的に捉えられる
- 3タイプの開発プロジェクトを比較することで、「慈善型」を否定するのではなく、それぞれの長所、短所を確認できる。

* 個人的援助と組織による開発援助とのギャップ(「慈善型援助」と「慈善型開発」?)

②国際協力の類型化の明瞭性

「慈善型開発」→「技術移転型開発」→「参加型開発」

従来の開発学では・・・

- ・緊急救援から開発援助へ
- ・「魚」ではなく「魚の釣り方」を(技術協力へ)
- ・技術移転から参加型開発へ
- ・D.コーテン「NGO世代論」(アドボカシー、ネットワーク・キャンペーン)
- ・C.モーザー「福祉アプローチ」から「エンパワメント・アプローチ」へ

- * 開発現場に特定、分かりやすい日本語
- * 「参加型開発」で終わりという潔さ

③国際協力と開発教育の融合性

- 開発教育の原点(途上国の現場)への回帰
- 「参加型社会」の創設と「参加型学習」という方法論による結びつき
- 「学び」を通じた新しい交流、協力の提案(開発教育なヒトならではの国際協力の形)

地球の木「幸せ分かち合いムーブメント」

高校生、教師へのPRA研修の様子



地球の木「マジカルバナナ」教材の実践・交流



現地NGOによる参加型教員研修
ララヒル・コミュニティ・スクール



これからの国際協力・開発教育の課題

- ①グローバル資本主義による格差、「取り残された人々」をどうするのか？
→開発援助から社会運動へ。枠組みへの積極的アプローチの必要。
- ②学校現場やマスコミ、一般の意識が慈善型から脱却するために何ができるのか？
→失敗例の提示と具体的アプローチの提案。援助側の心情への理解と根気ある働きかけ。